

我在白老的日子

私が白老にいた日々

My Days in Shiraoi

陳靜宜 媒體工作者

尾原仁美 翻譯

圖片提供 陳靜宜



▲ 本文作者（中）在博物館時與工作人員的合照。

如果有機會，我建議你也在人生裡幹一兩件看似瘋狂的事情，只要在不傷害到別人的前提下，便無傷大雅。在無人的海邊裸奔、到印度寶萊塢學跳舞、談一段黃昏戀，或者閉著眼睛，往世界地圖上任意一指，到聽都沒聽過的城市旅行，萬一是海中央也行，總有辦法到得了。像我，就到了白老。

白老（Shiraoi）是日本北海道的一個小鎮，規模近似台灣的「二水」、「集集」之類的地方，有次一位觀光客問路，「請問白老的鬧區怎麼走？」居民回答，「您站的地方就是啦。」這樣可以想見它的荒涼吧。

「白老（Siraw-o-i）」在愛努語意思是「虻多的地方」，不過從漢語看來，卻有「白髮蒼蒼、年華老去」之感，事實也是如此，這個年輕人大量外移的城市，多半就只有老人與小孩，還有愛喧

もし機会があれば、一生のうちひとつやふたつは突拍子もないことをしてみることをお勧めする。人を傷つけないという前提があれば、なんでも構わない。裸で海辺を駆けてみる、インドのポリウッドで踊りを習ってみる、老いらくの恋をしてみる。あるいは、目を閉じて、世界地図のどこかを指差し、名前を聞いたこともないような街を訪れてみる。たとえ海の真ん中でも構わない。私の場合、そんな風にして白老へ行った。

白老（しらおい）は日本の北海道にある小さな町で、台湾で言えば「二水」や「集集」ぐらいの規模の場所である。ある観光客が「白老の繁華街はどこですか」と聞いたら、住民は「今あなたが立っているところがそうです」と答えたそうだ。それほど荒涼とした場所である。

「白老（シラウ・オ・イ）」とは、アイヌ語で「虻（アブ）が多い場所」という意味であるが、中国語的に見ると、「白髮蒼蒼、年華老去」（すっかり白髪になり、年を取ってしまった）のような感じがする。事実、若者たちの多くは大都市へ出て行き、残っているのは老人と子供、

賓奪主的烏鴉與偶爾串場的狐狸而已，有時候連人都不大容易遇到哩。

大學時代，我兼家教工作，但並不算穩定，在一度貧困交迫之際，在學校佈告欄看見「徵日文翻譯／一日千元，約一星期」的外快，心想該不是伴遊女郎吧，好吧，就算伴遊應該也能勝任，便姑且一試。沒想到到了現場後發現，當真是伴遊——陪著日本白老愛努原住民博物館一行二十多人到台北、霧台等地進行原住民交流活動。活動結束後，當時的館長問我，「畢業後到白老來工作吧，那裡每天有很多來自台灣的觀光客，當博物館的中文解說員？」我不知怎麼回答，那脫離了人生得以想見的軌道，但也充滿冒險的氣味。

我總覺得人在世界上都有適合自己的一處地方，那是個凹槽，人一落到凹槽裡便完全吻合，於是定居生根；如果不是，便要搬家、換工作，渾身都覺得稜稜角角不對勁。我畢業後於是朝這可能的凹槽奔去。

到白老的路途迢迢，先要到東京或大阪轉機，到了千歲機場再轉電車到札幌，再轉火車到白老，需花上一整天時間，還記得一下機，我就被接送到鎮上的一家保齡球館，館長與幾位館員早在那裡，幫我點了一碗拉麵，館長說，「這是第一課，北海道最有名的是拉麵，要

それに、主の座を奪ったカラスと、時々現れるキツネ。時には人を見かけるのも珍しいぐらいの場所なのだ。

大學時代、私は家庭教師のバイトをしていたが、収入は安定しなかった。一度貧困極まったとき、学校の掲示板で「日本語通訳募集／一日千元、約一週間」という仕事を見つけ、まさかガイドなんかやらされるわけでもあるまい、仮にそうだとしても何とかかなるだろう、と試してみることにした。現場に行ってみると、本当にガイドだった——日本の白老アイヌ民族博物館の一行20数名が台北、霧台などで原住民と交流活動するための。イベントが終わった後、当時の館長は私に言った。「卒業したら、白老に来て働いたらどうですか。毎日たくさん台湾から観光客が見えますから、博物館の中国語解説員をやりませんか。」その人生のレールからはずれ、しかし冒険の香りに満ちた誘いに、私はどう答えたらよいかわからなかった。

私は、人には誰にも、世界のどこかに自分に合った場所がある、と思っている。それは「くぼみ」みたいなもので、そこに一度はまり、ぴったりと合ってしまうと、そこに根を生やし、定住する。もし合わなければ、引越し、仕事を換えるしかなく、全身が角張っておかしくなる。私は卒業後、この「くぼみ」に賭けてみることにした。

白老への道は遠い。まず東京か大阪で飛行機を乗り換え、千歳空港で電車に乗り換えて札幌まで行き、さらに列車に乗り換えなければならない。丸々一日がかりである。最初に着いたとき、私はそのまま町にあるボーリング場へ連れて行かれ、そこで待っていた館長と数人の館員は、私に一杯のラーメンを注文してくれた。館長は言った、「これは最初の授業です。北海道で一番有名

學會怎麼吃才能當一個北海道人，麵要用吸的、要發出呼嚕呼嚕的聲音才行。」我點點頭，吃得上氣不接下氣。陽光透過落地玻璃照射進來，那是一大片湛藍海洋。後來只要休假，我便會走到海邊去，想那海終究是跟台灣連接著，冬天見不到灰黑沙灘，雪的盡頭就是海，只有白與藍交接。

白老天氣在北海道來說不算是最厲害的，不過冬天也曾到零下 14 度，尤其席捲著海風更顯冷冽，但沒有想像中可怕，冷一旦到了盡頭，就沒有感覺了。一年中有半年都見得到雪，雪會呈現不同的樣貌，融雪、暴風雪、細雪，一次早晨我差點睡過頭，用水潑個臉就衝出門，一路奔跑到博物館打卡，後來發現沾溼的頭髮竟結成了冰條。

冬天還有一件麻煩事，每天睡前要將家裡水閥閉鎖，再放出所有水龍頭裡餘水，到了隔天再開啟水閥，作用在於戶外氣溫太低，水管可能因此結冰，將造成住戶水管全數不通，這也是雪國居民的必備功課。

博物館裡最美的莫過位於附近的「波羅多湖」了，那湖很北海道，我經常怔怔望著它發呆，春湖冰漸融；夏天動物園員工會帶小熊出來蹣跚，熊長得很快，沒多久就比人高，沒法靠近了；秋天蕭瑟，落葉怎麼掃也掃不完，等沒了落葉，

なのはラーメンです。ラーメンがちゃんと食べられて、はじめて北海道人となれるんです。麵は吸うんです、『ツルツル』って音を出さなくちゃいけません。」私は頷き、はあはあ言いながら食べた。陽光がガラス窓から射し込み、外は深い青色をした海だった。後に、私は休暇の度に海辺に行った。この海は台湾と繋がっているのだ、と思いながら。冬には黒い砂浜は見え、雪の終りが海で、白と青だけが繋がっていた。

白老の天気は、北海道の中ではそれほど厳しいわけではないが、それでも冬には零下 14 度まで下がったことがある。特に、海風に吹かれるとより一層寒く感じるが、想像していたほどではなかった。極限まで行くと、感覚がなくなってしまうのだ。一年の半分は雪がある。雪にもみぞれ、吹雪、細雪など、いろいろな顔がある。一度、私は寝坊し、水で顔を洗ったまま家を飛び出した。博物館に着きタイムカードを押してから、濡れた髪がつららになっているのに気付いた。

冬にはもうひとつ、面倒なことがある。毎日夜寝る前に、水栓を閉め、水道管の中の水を抜かなければならないのだ。そうしなければ、戸外の気温が低すぎて水道管が凍ってしまい、全世帯の水が止まってしまうため、これは雪国の住民がやるべき必須事項である。

博物館で最も美しいのは、付近の「ポロト湖」である。そこはとても北海道的で、私はいつもそこでぼーっとしていた。春には氷が徐々に解け、夏には動物園の職員たちが小熊を連れて散歩させる。熊の成長は早い。あっという間に人より大きくなり、近づくこともできなくなる。秋はひっそりとして、落ち葉は掃いても掃い

冬天便來臨，湖面結冰，就冒出一群又一群的釣客來此鑿冰洞釣魚。

愛努人與日本人外貌雖已十分相似，但仍或多或少有歧視的問題存在。一次和兩位當地原住民喝酒，雖已為人父，但談到童年記憶仍淚漣漣，一位從小就被同學揪著長手毛嘲笑；另一位則是愛努人與美軍的混血兒，他則被暗稱雜種，這是很特別經驗，就大多情況下，愛努人總要表現對自己的血統自豪，但那時我碰觸到他們脆弱而柔軟的一面。

另一次，我跟著博物館的人巡迴表演，在電梯裡遇到陌生人問，「真是不好意思，請問你們是愛努人嗎？」館員很大方回答，「正是。」但等那人離開後，館員喃喃自語，「他問就問，幹嘛要說不好意思？」

在白老最難忘的經驗之一，便是參與了「祭熊靈（Iyomante）」，由於保育觀念日盛，早不可能有獵熊行為，要不是動物園裡正好有隻壽終正寢的老熊的話，根本難再現祭典儀式，過程按照古法進行，夜幕低垂之際，每人聲嘶力竭地吶喊，汗水淋漓，圍繞著烈火，像參加一場神秘而詭異的活動。我最終分到了一小碗熊肉湯，熊肉被細切成火柴大小，大抵是熊也年邁，咬起來挺柴還帶點騷味，難怪滿漢全席裡，要只取掌肉來烹煮。

ても追いつかず、落ち葉がなくなると冬が来る。湖面が凍結し、釣り人たちが次々と現れて、氷の穴で魚を釣る。

アイヌ人と日本人は、外観は今ではよく似ているが、多かれ少なかれ差別の問題が存在している。一度二人のアイヌ人とお酒を飲んだとき、もう父親になっている彼らは、幼年時代の思い出を語ると涙を流した。一人は小さい頃から同級生に毛深いと笑われていた。一人はアイヌ人とアメリカ軍人の混血児だったが、影で雑種と呼ばれた。このときのことは、とても特別な経験だった。アイヌ人は、多くの場合自分の血統を誇っていると言うが、あのとき私は、彼らの脆弱な一面に触れたのだった。

また、私が博物館の人と一緒に巡回公演に行ったときのこと。エレベーターの中で知らない人から、「大変失礼ですが、あなたたちはアイヌ人ですか？」と聞かれた。館員は躊躇なく「はい」と答えたが、その人がいなくなった後、館員はひとりごとのように言った。「聞きたいなら聞けばいいのに、なぜ『大変失礼』なんて言うんだ？」

白老で最も忘れがたい経験のひとつは、イヨマンテ（熊の霊送り）に参加したことだ。動物愛護観念が盛んな昨今、熊はもう行われなくなり、動物園で臨終を迎えた熊にちょうど居合わせない限り、この祭典を再現することは難しい。古式に則った儀式は、夜の帳が下りる頃始まる。みなが声の限りに叫び、汗を滴らせながら火の回りを回るといふ、神秘的で奇怪な祭りである。最後に熊肉が入ったスープを振舞われた。熊肉はマッチ棒ぐらいの大きさに細切りされていたが、年を取った熊だからだろうか、噛むと少し臭みを感じた。道理で満漢全席では熊の手しか使わないわけだ。

我在白老待的那一年多時光，正好也是九二一地震發生那年，當時一群阿美族人到愛努博物館交流，晚上原是同歡晚會，大家喝了酒後便唱起歌來，其中一位阿美族人的親人在地震中傷亡，唱著便心有所感地哭了，其他跟著和的人也哭了，這哭像會傳染，最後我也哭了，甚至連白老愛努人也哭，初次見面就哭成一團，一位愛努人邊哭邊笑跟我說，「我不知道為何哭，只不過看你們哭，我也要掉眼淚了。」

那晚很神奇也很混亂，什麼事都像有傳染性，一位阿美族人將他母親織的背包給我、一位將祖傳頭帶給我，接下來每個人都解下自己身上的一樣東西給我，後來我脖子上還多了一條金項鍊，他們說，「你一個台灣人在這裡，我們要你好好的。」那次發現，台灣人真的好靠近。

雖已是七、八年前的事情，有些片段已經模糊或破損，但我相信記憶一直都在那裡，只待我們何時去翻找而已。

私が白老で一年余りを過ごした頃は、ちょうど九二一地震が発生した年だった。当時アミ族の人たちとアイヌ博物館の交流があり、夜は歓迎会が行われた。酒を飲み、歌が始まったとき、地震で親族を亡くしたアミ族の一人が、歌ううちに感極まって泣き、つられて他の人も泣き出した。そしてまるで伝染するように、最後には私や、白老のアイヌ人まで泣いてしまった。初対面なのに全員が泣いていた。一人のアイヌ人が、泣きながら、笑いながら、私に言った。「なんで泣いているのかわからない。ただあなたたちが泣いているのを見ただけなのに、私も泣いてしまった」。

あの晩はとても不思議で、混乱していて、すべてのことが伝染するようだった。あるアミ族は、彼の母親が織ったバッグを私にくれ、ある人は祖先から伝わったヘアバンドを私にくれた。その後全員が自分の身に着けているものをひとつずつ私にくれて、最後には私の首に金のネックレスまでつけられていた。彼らは言った、「あなたのような台湾人がここにいる、あなたには元気でいてほしい」と。そのとき私は、台湾人の親密さを知った。

もう七、八年前のことであり、すでに曖昧になっていたり壊れたりしているものもあるけれど、記憶はずっとあそこにあり、私たちが再び訪れて掘り起こすのを待っているのだ、と私は信じている。

1993年の世界原住民大會後，愛努人與澳洲原住民也在北海道重逢聯誼。

